

日本旧石器学会
ニュースレター 第43号
NEWS LETTER No. 43
JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



男鹿半島の石材原産地を求めて

中村由克（明治大学黒曜石研究センター）

神田和彦（秋田市文化振興課）

赤星純平（秋田県埋蔵文化財センター）

はじめに

東北地方日本海側の石器石材は珪質頁岩が中心であり、良質なものは関東・中部地方にもたらされたと考えられている。黒曜石、サヌカイトに匹敵するぐらい広域にひろがるものであるが、原産地と消費地遺跡の対応関係をとらえる研究手段は見つからない。筆者らは、2013年以降、秋田地域の珪質頁岩の原産地調査をつづけており、旧石器時代人の石材獲得の様相解明に取り組んでいる。2019年4月に新第三紀層の模式地となっている男鹿半島における石材調査をおこなった。

脇本の黒曜石と珪質頁岩

男鹿市脇本は黒曜石や阿部朝衛氏の「半透明の頁岩」産地として知られている地点である。この付近に分布するのは中期更新世の鮎川層である。北西―南東の走向で北東方向への傾斜を示す砂層・砂礫層の地層である。この中に珪質頁岩や数は少ないが黒曜石の円礫が含まれる。珪質頁岩は直径3～15cm程のものが多く、まわりは約1cm程度の風化殻ができています。灰褐色で珪化のいい良質のことが多い。これらの珪質頁岩は、男鹿半島のより西側に分布する女川層分布域から礫として供給されたものと考えられる。黒曜石は最大で約4cm程のものも見られた。表面は円磨されて灰色になっている。従来、この黒曜石は男鹿半島中央部の真山流紋岩類のものとされていたが、2014年に藤本幸雄氏による研究で男鹿半島西端の戸賀火山（約42万年前）に由来することが明らかになった。

女川層の珪質頁岩

三種川流域や雄物川下流域の石材調査では、石器に使えるような珪質頁岩は女川層の中にどこでも含まれるものではなく、原産地でも希少であることが判明している。近くに酸性（流紋岩質）凝灰岩層が



男鹿半島と調査地点



脇本の黒曜石礫の産状

あり、そこから玉髄（ SiO_2 ）が熱水により多くしみ込んだ産状や大規模な酸性凝灰岩（火砕流）のなかに偽礫として入った泥（岩）が熱水により強く珪化したものなど、局所的な分布が分かっている。

男鹿半島南部の女川に近い鵜ノ崎海岸では、波打ち際に珪質頁岩の礫が多くある。暗褐色の樹脂状光沢をもつ良質の珪質頁岩で、表面には灰白色の風化殻が厚く付着している。よくみると所々に女川層の

傾斜した地層が露出していることから、この付近の女川層の中に含まれていたものと推定される。この珪質頁岩を顕微鏡観察すると、多数の円形の珪藻化石が含まれている。このことから、珪藻質の泥岩中に形成されたノジュールとしての産状であると思われる。このような女川層本体に珪質頁岩が多く含まれる産状は、秋田県内でも多くはなく、新潟県関川村上関の獅子舞岩などと共通するものである。

古い珪質頁岩の存在

鵜ノ崎よりさらに西の潮瀬ノ岬は、ジオサイトになっていて有名なゴジラ岩がある海岸である。その近くにはゴジラのしっぽ岩と名付けられている珪質頁岩が立った脈状の産状がみられる。この付近は古第三紀の門前層が分布しているところで、珪質頁岩はこの砂礫岩がたまった後に下の地層より圧力で脈状に入り込んだ「碎屑岩脈」であることが観察された。女川層より古い地層中にも珪質の堆積岩はわずかながら分布しており、これらの希少な産地にも注意する必要がある。

珪質頁岩の成因を考えた産地推定

珪質頁岩の産状を調査すると、特殊な生成条件の所にだけ石材になりうる珪質頁岩があることが理解される。このような産地の確認には、地質図や地質論文を参考にして地層情報を手掛かりにした石材調査が不可欠であることが分かる。珪質頁岩の産地推定を目指した研究もはじめられている（神田ほか、投稿中；中村2019）。

文献

神田和彦ほか（投稿中）雄物川下流域における珪質頁岩の分布調査。秋田考古学，63.

中村由克（2019）秋田県湯沢市堀ノ内遺跡における縄文時代の石器石材。秋田県埋蔵文化財センター研究紀要，22，1-22.



鵜ノ崎海岸と踏査の様子



鵜ノ崎海岸で採取された珪質頁岩



調査メンバー 金ヶ崎にて



潮瀬ノ岬の碎屑岩脈

2018 年度日本旧石器学会賞 受賞者報告

ニュースレター42号で報告しました通り、2018年度学会賞を伊藤 健会員（東京都埋蔵文化財センター）、2018年度奨励賞を岩瀬 彬会員（首都大学東京）が受賞されました。「日本旧石器学会賞選考委員会による選考理由」および「受賞者の言葉」を報告いたします。

2018年度学会賞

伊藤 健会員（東京都埋蔵文化財センター）

選考理由

学会賞は、旧石器研究の発展に貢献し優れた業績をあげた会員に授与する。学会員からの推薦に基づき、当委員会は2018年度の学会賞受賞者として伊藤 健会員を選考した。伊藤会員は、1980年代後半より武蔵野台地をフィールドとした地域編年の構築に精力を傾けてきた。いわゆる「野川・月見野」以降、ローム層序を標準として一定の確立を見たと思われる「武蔵野編年」に対して、常に新出資料によって得られた新たな視点からの検証を怠らず、その成果を多数発表し続けている。ナイフ形石器の技術形態学的視点は特に氏の得意とするところで、その成果は「ナイフ形石器文化編年の形成過程-V層・IV層下部段階の解体に向けて-」として本学会誌（『旧石器研究』3，2007年）にも発表されている。近年発表された「後期旧石器時代「武蔵野編年」の新地平-槌状剥離を有する尖頭石器群をめぐって-」（『東京都埋蔵文化財センター研究論集』32，2018）においてもその姿勢は貫かれ、「武蔵野編年」の再構築が企図されている。一方で、『石器文化研究会』の代表世話人を長い間務め、数多くのシンポジウムの企画・運営を支え、関東地方における旧石器研究のリーダー的存在としてその発展に貢献し、その経験は本学会の役員としての活動にも生かされ、本学会の発展にも寄与してきた。また、長い間東海大学の講師を務め、後進の指導にも力を注いでいる。以上の業績は学会賞に相応しいと考える。

（日本旧石器学会賞選考委員会委員長 鈴木美保）

受賞の言葉（伊藤 健）

この度は、栄誉ある2018年度学会賞を授与いただき、大変光栄なことで感謝いたします。

東京都東久留米市多聞寺前遺跡の発掘調査に参加して以来、東京都、特に武蔵野台地での後期旧石器

時代の遺跡調査に従事してきたことに通じて、武蔵野台地を中心とした南関東地方の石器群の様相、特に石器型式、石器をめぐる経済活動、地形と地域性の関係などについて



伊藤会員

て研究を続け、その成果は博士論文として結実させることができました。その研究の肝はローカリティの提示を通じて、グローバリズムの時代におけるローカリズムの観点からの挑戦ということです。このことは私が行政関係機関に身を置く行政内地域研究者として、旧石器研究の発展にどのように貢献できるかということへの挑戦でもありました。例えば石器文化研究会は、その営みの大きな活動の場になりました。

その一方で、大学教育に携わってきました。学生たちに旧石器考古学の知識と人生習練の場を授ける仕事は、私自身の自己研鑽にも大きな影響を与えました。そして最後に、日本旧石器学会における総務、会計、研究企画委員としての活動も、今回御評価いただいた点の一つと思っています。運営の実務については些かの自信もあり、僅かばかりでも旧石器研究の発展に寄与できたものと考えています。

末尾になりますが、この受賞について日本旧石器学会の皆様には謝意申し上げますとともに、今回の受賞を機に、若い世代の研究者の間で地域研究の蓄積と実務での積極的な関与が進むことを願って受賞の言葉としたいと思います。ありがとうございました。

2018年度奨励賞

岩瀬 彬会員（首都大学東京）

選考理由

奨励賞は、研究者の育成と研究の奨励を目的として、会誌「旧石器研究」等学会刊行物に優れた業績を発表した会員に授与する。岩瀬 彬会員は石器使用痕観察結果の成果を中心にこれまで「旧石器研究」第7号、第8号、第12号、第13号に共著を含む4本の研究論文を発表、研究大会でも、ポスター発表、シンポジウム発表などを毎年のように行ってきた。会誌への5本目の投稿となる第14号「古本州島東半部における後期旧石器時代の石器使用の変異性

とその含意」(2018)では、日本の旧石器時代石器使用痕分析研究の成果を集成し、その結果を民族誌記録なども援用して、道具としての石器の多様性や複雑性、石器の多用途性などを時期別に比較・検討、石器使用の相対的な差を導き狩猟採集民の狩猟戦略に見られる行動的変異のモデル化を模索している。本研究は道具の機能推定や使用行動などに関わる直接的な行動復元という使用痕分析の従来の方法的枠組みを超え、新たな枠組みを提示したものとして高く評価されると同時に今後の発展が大いに期待される研究である。以上のような業績は奨励賞に相応しいと考える。

(日本旧石器学会賞選考委員会委員長 鈴木美保)

受賞の言葉(岩瀬 彬)

この度は日本旧石器学会奨励賞を頂戴し、大変光栄に存じます。誠にありがとうございます。賞に推薦いただいた論文「古本州島東半部における後期旧石器時代の石器使用の変異性とその含意」は、2017年度シンポジウムの発表内容を改訂したものとなります。石器使用痕分析が単なる石器の機能推定をこえて、そのデータを用いてどのような議論を展開できるのか探索的に検討することが論文の狙いの一つです。2009年冬頃に野尻湖ナウマンゾウ博物館横のプレハブ小屋で石器の顕微鏡観察をしているときの閃きをもとに、あしかけ10年近くをかけてまとめたものになります。当時、使用痕分析の基礎的実験を終え、実際の資料分析を試みてみたいと考えていたところ、整理作業と報告書作りに関わった上ノ原遺跡の杉久保石器群や尖頭器石器群を観察する機会を得ました。そこで使用痕分析を試みたのですが、多量に出土した彫器に角・骨・象牙の加工を示す痕跡が見つからないことに当惑しました。荒屋型彫器には明瞭な角や骨の使用痕が多量に観察される一方で、なぜこうした彫器の使い方に違いが生じるのか。ひょっとしたら石器の使い方には地域的あるいは時期的な多様性がある、そこには当時の人類の生活全体の違いが反映されているのではないのか。石油ストーブにあたりながら得たこうした着想を、私自身の石器使用痕分析だけでなく、諸先輩方の成果を援用させていただきつつ、少しずつ形にしていった研究がこの論文になります。石器使用の変異性とその含意を考察するための1つの例を示すことが出来たのではないかと考えています。ご意見・ご批判を頂戴できれば幸いです。

上ノ原遺跡の分析成果そのものについてはこの論文に含めておりませんが、中村由克氏には資料分析の際に多大なるご高配を賜りました。石器使用痕分



岩瀬会員受賞風景

析については山田しょう氏や高瀬克範先生をはじめ、石器使用痕研究会の皆様にご教示いただきました。また東京都立大学および首都大学東京での小野昭先生や出穂雅実先生をはじめ、研究室の諸先輩方や同輩、後輩の皆様からご指導および議論の機会をいただきました。2017年度シンポジウム後に佐野勝宏氏と森先一貴氏からいただいたアドバイスがこの論文をまとめる上でとても有益なものとなりました。お世話になりました皆様に深く感謝申し上げます。受賞に満足することなく、これを励みに研究に精進して参りたいと思います。

2019 年度第 1 回普及講演会報告

標記の普及講演会が、2019年8月3日(土)に東京都埋蔵文化財調査センターを会場として、東京都埋蔵文化財センターと共催で開催された。

日本旧石器学会会長の阿子島香氏(東北大学大学院文学研究科教授)が「アメリカとフランスの旧石器研究を比較して考える」と題して講演を行った。このテーマは、第17回日本旧石器学会シンポジウム「旧石器研究の理論と方法論の新展開」に続くものとして設定された。日本、ましてや東京都にもなじみ深いとはいえない「玄人好み」のテーマと思われたが、当日は40名の参加があり、旧石器研究への関心の高さを窺うことができた。

氏は、国ごとに考古学の理論と方法論は異なるが、その背景には文化や歴史の捉え方の違いがあるとする。今回の講演は、アメリカとフランスを取り上げて考察し、さらに日本における旧石器時代研究を展望しようとするものであった。

先史考古学を広義の文化人類学の一分野とし、諸民族の多様性を主に環境適応の観点から研究してきたアメリカ、地質学との連携を基盤とし、岩陰・洞



阿子島香 日本旧石器学会会長の講演風景

窟遺跡を対象に層位学と型式学を統合した精度の高い調査研究を通じて人類文化の時間的変化の再構築に重きを置いてきたフランス。両者の研究の歩みが、アメリカにおいては生態人類学の祖であるジュリアン・スチュワード、新進化主義のレズリー・ホワイトからエルマン・サーヴィス、マーシャル・サーリンズ、そしてニューアーケオロジー運動の中心であったルイス・ビンフォード、フランスにおいては型式学を構築したフランソワ・ボルドとソンネヴィユ＝ボルド、動作連鎖論のアンドレ・ルロワ＝グーランとその技術学を継承するジャック・ペレグランらの業績に基づいて解説された。

そうした両国においても、もの言わぬ遺物からいかに過去を解釈していくかという、本質的な課題がやはり残されているという。現在から過去へ、静態から動態へ、この両者をどのように架橋していけるかが考古学の理論と方法論の中心的な課題であるとする。

そして、様々な国の考古学史と現状を分析することによって、いまだに日本の旧石器時代研究にみられる範型論とそれに基づく集団論といった、素朴な方法論と解釈を問いたさすべきというのが、日本の旧石器時代研究への氏の提言である。

講演を通じて、ビンフォードやペレグランらの研究に直接触れ、議論を交わしてきた氏ならではの臨場感あふれる語りが印象的であった。専門書や論文等では見ることのできない、人物像や遺跡調査風景などは、拝見していて胸躍るものであった。一般の方々にはやや難解な講演であったと思われるが、遺跡や遺物から過去を語ることがいかに難しいかを感じてもらえたのではないだろうか。世界中の考古学者が日々頭を悩ませながら、様々な思いを巡らしながら探究している、まさに考古学の醍醐味であるこのプロセスを実感してもらう、この上ない機会になったと思われる。（広報委員会 尾田識好）

役員選挙について

役員選挙について

2019年12月6日

会員各位

日本旧石器学会選挙管理委員会
委員長 伊藤 健

日本旧石器学会の役員選挙告示

日本旧石器学会会則6・7条および役員・会計監査委員・顧問選出規定により、下記のとおり、役員選挙を実施いたします。

記

1. 立候補者・候補者推薦の受付

立候補者および候補者推薦は、別記作成方法により、2020年2月15日（土）までに日本旧石器学会選挙管理委員会（〒192-0364 東京都八王子市南大沢1-1 首都大学東京 人文社会部 人文学科歴史学・考古学教室気付）に届け出てください。その折に公報に掲載する原稿は100字以内です。

2. 選挙公報・投票用紙

2020年2月下旬に発送します。

3. 投票期間

2020年3月1日（日）～3月20日（金）

4. 役員の決定

投票の結果、得票数の上位22位までを役員とします。ただし北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、九州・沖縄7地区の上位得票者から役員1名を選出し、他15名を上位得票者数によって役員とします。辞退者がいる場合は順次繰り上げとなります。

5. 被選挙権のない会員

現役員22名は全員改選の対象になります。以下の会員を除く全会員に被選挙権があります。被選挙権がない会員は、阿子島香、岩瀬 彬、沖 憲明、海部陽介、加藤真二、佐野勝宏、長崎潤一、中沢祐一、橋詰 潤、馬籠亮道、松本茂、光石鳴巳、三好元樹です。

2019年12月6日

立候補者・推薦者各位

日本旧石器学会選挙管理委員会
委員長 伊藤 健

日本旧石器学会の役員選挙にかかわる公報の
原稿作成について（依頼）

役員選挙立候補・推薦にかかわる公報の原稿につ

いては、下記により作成方お願い致します。

記

1. 原稿作成方法

A 4 版横書きのペン書き、またはワープロ原稿 (A4, 10.5ポイント, 横書き, ワード他)。なお、ペン書きの原稿はワープロ原稿に直して掲載します。

1. 推薦候補

①候補者名, ②推薦内容, ③推薦者氏名

2. 立候補

①立候補者名, ②自薦内容

②の内容は100字以内でお願いします。

2. 送付方法

下記に郵送してください。推薦候補の場合は、本人の承諾を示すサインまたは押印、推薦者のサインまたは押印が必要です。また、立候補の場合は電子メールに添付して送付しても構いません。

3. 原稿締切

2020年2月15日 (土)

送付先

〒192-0364 東京都八王子市南大沢 1-1 首都大学東京 人文社会学部 人文学科歴史学・考古学教室気付

電子メールアドレス jimmu@palaeolithic.jp

2019 年度 学会賞の推薦について

「日本旧石器学会賞規定」に則り、2019年度の学会賞受賞候補の推薦を募ります。旧石器研究の発展に貢献し優れた業績をあげた会員を推薦してください。

1. 推薦内容

学会賞受賞候補

2. 推薦期間

2019年10月1日 (火) ~ 2020年2月14日 (金) (必着)

3. 推薦者の資格

日本旧石器学会会員

4. 推薦方法

学会賞受賞候補の氏名、学会賞受賞候補の推薦理由、推薦者の氏名・連絡先をご記入の上、郵送もしくは電子メールにより下記の事務局あてに送付して下さい。

5. 注意事項

- ・推薦は自薦・他薦を問いませんが、お一人につき一名を限度とします。

- ・学会賞受賞候補は、日本旧石器学会会員に限りません。推薦にあたって、学会賞受賞候補ご本人の承諾を得る必要はありません。

- ・推薦の書式は自由です。

- ・推薦理由は概ね100字から300字にまとめてください。

6. 応募先・照会先

日本旧石器学会事務局

(担当: 佐野勝宏・岩瀬 彬)

〒192-0364

東京都八王子市南大沢1-1 首都大学東京 人文社会学部 人文学科歴史学・考古学教室気付 (jimu@palaeolithic.jp)

2020 年度 総会・研究発表・ポスターセッション発表の募集

2020年6月13日・14日に、札幌国際大学 (北海道札幌市清田区) にて第18回総会・研究発表・ポスターセッションを実施します。ついては、一般研究発表とポスター発表を募集します。発表の中から、新たに設置されました「若手奨励賞」の選考も行いますので、若手会員の皆様には積極的なエントリーをお願いいたします。詳細は、近日中に日本旧石器学会HPに掲載予定です。

また、研究発表に引き続き、シンポジウム「北海道における旧石器時代の環境と人類居住」(仮)を開催します。さらに、会場には北海道の旧石器資料を展示し、資料見学の時間も設ける予定です。どうぞ参加のほど、よろしくお願いいたします。

アジア旧石器協会 (APA) 2020 年中国大会のお知らせ

アジア旧石器協会 (APA) 2020年中国大会のファーストサーキュラーがとどきました。日本旧石器学会ホームページにアップしていますので、ご覧ください。

- ・期間: 2020年8月22日~28日

- ・場所: 中国河南省鄭州市

- ・参加費: 300 USドル

参加を希望される方は、添付したサーキュラーに記入したうえで、先方にお送りください。

また、参加者の把握を行いたいのので、渉外委員長 加藤真二 < zhener63714@yahoo.co.jp > までご連絡ください。

(渉外委員長 加藤真二)

関連学会情報

第45回九州旧石器文化研究会（佐賀大会） 開催報告

第45回九州旧石器文化研究会佐賀大会は2019年11月9日（土）、10日（日）の両日、佐賀県伊万里市の生涯学習センターで開催された。参加者は遠方の方も含めて約40名とやや少なかったが、最近の石材研究の進展から「西北九州産黒曜石原産地研究の諸問題」というテーマを設定し、活発な議論が行われた。

1日目には、研究発表を3本、伊万里市の一本尚之氏に腰岳について研究略史や周辺の発掘調査成果とともにここ数年実施している腰岳の悉皆的な踏査活動の成果を発表して頂いた。また、佐世保市の山下祐雨氏に針尾島周辺の原産地について複雑な名称や産出状況について分かりやすくまとめて頂き、最近の地質的な調査成果も含め発表して頂いた。さらに筆者は発見が比較的新しい佐賀県嬉野市所在の椎葉川産黒曜石原産地について、その産出状況から原石の状態、周辺や消費地での動向について発表した。

2日目には、研究発表を1本と討論、午後から腰岳へ現地見学を行った。研究発表では長崎大学の隅田



研究会の様子



現地見学参加者 腰岳山頂にて

祥光先生に蛍光X線分析の基礎的な説明から黒曜石の原産地推定の新たな分析方法等、最新の研究動向等も説明して頂いた。その後の討論では、各原産地の状況を整理しながら、後期旧石器時代における時期別の石材消費行動の動向を整理し、問題点を炙り出した。現地見学では腰岳の露頭や高標地での石器採集ポイント等を案内し、山頂にて記念撮影を行って会は終了した。

十数年前、九州の石器研究者の諸先輩方は「石器原産地研究会」を立ち上げ、石材研究を大きく前進させた。先学を継承しつつ今後も原産地の様相を明らかにすべく、地道に研究を進めていきたい。

※ホームページ「ハカタントロプス」に九州旧石器文化研究会のページがあるので、そちらも是非参照ください。また他の研究会情報も掲載しています。

（情報発信・掲載を希望という研究会も大歓迎ですので越知までご連絡下さい。）（越知睦和）

第36回中・四国旧石器文化談話会（岡山大会） 開催案内

第36回中・四国旧石器文化談話会を下記の要領で開催いたします。また、当談話会発足当初から事務局として、2007年からは代表として、当談話会ならびに中・四国の旧石器研究を牽引してこられた藤野次史先生が、今年度末をもって広島大学を定年退職されることから、併せて記念講演も行います。

ご多忙中とは存じますが、ご参加いただきますようご案内申し上げます。

記

1 日時

2020年2月8日（土）、9日（日）

2 会場（予定）

岡山理科大学岡山キャンパスC2号館4F
岡山県岡山市北区理大町1-1

3 テーマ

「中国山地東部の石器石材

—野原遺跡群早風A地点の再評価から—

4 日程

2月8日（土）

13:00 受付開始 13:30 開会

13:40 記念講演

「旧石器時代における石器群の地域性と石材

—中四国地方を中心に—

藤野次史（広島大学総合博物館）

15:00 休憩（遺物見学）

16:00 「野原遺跡群早風A地点の再評価」

小嶋善邦（岡山県古代吉備文化財センター）

- 16:50 各県近況報告
 18:30 情報交換会（岡山駅周辺 会場未定）
 2月9日（日）
 9:00 「野原遺跡早風A地点・蒜山原遺跡群出土石器石材の産地推定」
 白石 純（岡山理科大学）
 9:50 「野原遺跡群早風A地点の編年的位置付け」
 三好元樹（志摩市教育委員会）
 10:40 休憩（遺物見学）
 11:00 質疑・討論 11:50 閉会
 5 見学遺物出土遺跡
 野原遺跡群早風A地点、戸谷遺跡、小林河原遺跡、フコウ原遺跡、笹畝遺跡、東遺跡（岡山理科大学調査分）など
 6 参加申込およびお問い合わせ
 ①参加者氏名、②連絡先、③情報交換会参加の有無を以下にお申し込みください。
 岡山県古代吉備文化財センター 小嶋善邦
 （連絡先：090-2299-5596）
 7 費用・宿泊等
 参加費（配布資料代含む）2,000円程度
 懇親会費 5,000円程度
 8 宿泊
 宿泊については、各自でご予約ください。

お知らせ

日本旧石器学会研究グループの募集

本学会では、旧石器考古学およびこれに関連する研究課題について国内・国外の情報を交換し研究することを目的として、研究グループを設置しています。

つきましては2020年度の日本旧石器学会研究グループを募集します。研究グループの発足を希望する会員は、グループ名、代表者名、連絡先、研究目的、活動予定期間、参加者数、運営費交付希望の有無などを記入して本学会事務局に応募してください。募集期間は2020年3月31日まで。応募・問い合わせ先は、事務局へ電子メールまたは郵送でお願いします。

メーリングリストの運用について

メーリングリストの運用を行っています。これは学会からの連絡手段として利用するとともに、情報

交換の場として活用していくために設けたものです。まだ登録していない会員諸氏におかれましてはメーリングリストにご登録ください。メールアドレスを、事務局のメールアドレス（jimu@palaeolithic.jp）までお知らせください。速やかにご利用できるようにします。強制するものではありませんが、ご協力をお願い申し上げます。

会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されているため、会費は原則前納とさせていただきます。会費未納の方につきましては会費納入状況を同封いたしましたので、未納金額を御確認いただき、速やかな納入をお願いいたします。振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。全国の郵便局にて簡単に手続きいただけます。既刊ニュースレター等でお知らせしたとおり、2018年度より年会費が6,000円になっております。会員各位の御理解をよろしくお願い致します。

また、転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても、本会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等で御連絡ください。

日本旧石器学会入会申込み手続きについて

日本旧石器学会入会申込みにつきましては、入会申込書を日本旧石器学会ホームページからダウンロード（<http://palaeolithic.jp/join.htm>）し、必要事項を記載の上、日本旧石器学会事務局へ郵送してください。入会資格審査にあたっては論文等著作物の提出を求める場合があります。ご協力ください。

日本旧石器学会ニュースレター 第43号
 2019年12月28日発行
 編集: 日本旧石器学会ニュースレター委員会
 橋詰 潤・馬籠亮道・山崎真治
 発行: 日本旧石器学会
 事務局: 〒192-0364
 東京都八王子市南大沢1-1
 首都大学東京 人文社会学部人文学科
 歴史学・考古学教室気付
 E-mail jimu@palaeolithic.jp
 HP <http://palaeolithic.jp/index.htm>